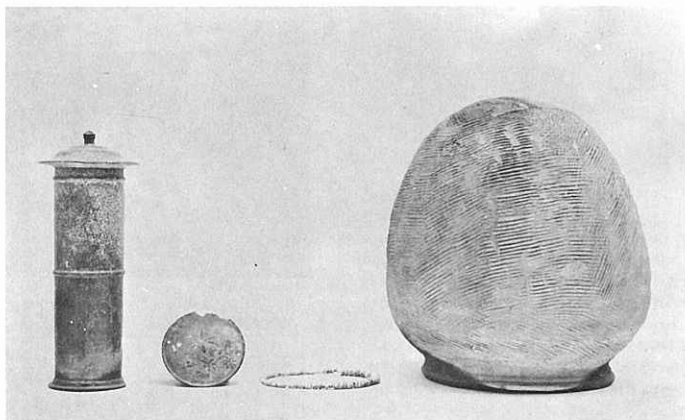


No. 4

博物館報



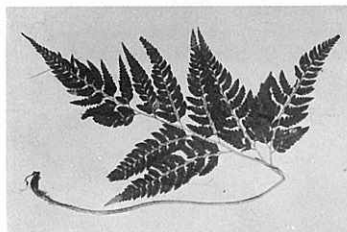
佐賀県重要文化財 山崎経塚出土品

写真説明 書写した経典を供養して地中に埋めたところを経塚と呼んでおり、その造営は平安時代から江戸時代まで長期間にわたって行なわれている。しかし、経塚の造営が最も盛んであったのは、平安時代後期から鎌倉時代前期にかけての時期であって、これが末法思想にもとづいて始まったものであることを物語っており、県内から発見されている30余りの経塚もその大部分はこの最盛期のものである。県内から発見されている経塚出土品の中で、その築成年代が明らかなのは、この多久市山崎経塚出土品のほか、大町町・相知町・春振山などから発見されている数例にすぎない。山崎経塚は、昭和32年11月に多久市多久町山崎の丘陵中腹から発見されたもので、地山を掘り凹めて経筒類を納め、その周りに木炭をつめ、上に小石を積み重ねて築かれていた。出土した遺物は、青銅製経筒・陶製外筒・瓔珞のガラス玉85個などである。経筒に「天治元年十月一日、橘国末並染鳴氏」の毛彫銘があり、この経塚が平安時代後期の天治元年（1124）に橘国末と染島氏によって造営されたものであることが知られる。経筒は信仰史上のみでなく、工芸品としても価値が高く、外筒の陶質土器は県内では類例の少ない平安時代の陶器として注目される。

目次

佐賀県重要文化財山崎経塚出土品	1
新確認佐賀県内植物について（その1）	2・3
白蛇山岩跡遺跡第一次発掘調査報告	4・5
聖像三体	6
裸婦—藤島武二作—	7
博物館日誌、行事お知らせ	8

新確認佐賀県内植物について
(その1)



ハガクレカナワラビ

本県における植物分類研究のめばえは早く、黒髪山において、現在は国指定の天然記念物であるカネコシダの自生が初認された明治38年頃が、その黎明期だといわれている。その後世界的大採集家フォーリー氏や、日本植物分類学の大家牧野富太郎博士、日本の天然記念物の国指定制度を育てることにつとめた三好 学博士をはじめ幾多の人々によって、研究調査が行なわれた。

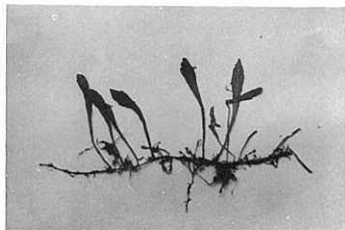
昭和39年6月、長年植物採集と調査のため県内の山野を踏査し、集録されていた嬉野町の馬場胤義氏を中心に、植物同好者の協力によって、佐賀県理科教育振興会と佐賀県理科教育協会が編集した「佐賀県生物誌・植物篇」には、23科 176種、22変種、2品種のシダ植物の目録が掲載されている。しかしその後、佐賀植物友の会をはじめ県内、県外植物分類研究者の採集、調査、研究によって、10科34種、1亜種、10変種、11品種、21種類の自生が「新確認され、昭46・8・1現在、25科 210種、1亜種、32変種、13品種、21種類、合計 277のシダ植物が、県内の山野に自生していることが明らかになった。

このうちハガクレカナワラビと命名された新種の発見は、我が国のシダ植物学界に大きな話題をなげかけた。またフギレイワヤナギシダ(新品種)、ハガネイワヘゴ(新雑種)などが、県内から採集された新たに命名されたことも忘れてはならないことである。

さらに21種もの雑種が7年間に、県内自生シダ植物として加えられたことは、地道な研究活動の成果だといえるが、複雑で微細なシダ植物の分類学的特徴を識別することのできるこの方面の権威者である、筒井貞雄(福岡市在住)、井上康彦(多久市北多久町出身・

大阪府在住)の両氏の協力的な活躍によるものである。県内から今後、いままでのように7年間で77種というスピードで、新自生を確認することはのぞめないにしても、馬場胤義氏をはじめ、山下幸平、井上英幸、倉成靖任の各氏が熱心に研究、調査をつづけているので、県内のシダ植物も更に明るみにでてくるだろう。

佐賀県生物誌・植物篇発行以降、自生が確認された植物名(39, 6, 1~46, 8, 1)は次のとおりである。



ヒメサジラン

シダ植物

科名・種名	産地
●ヒカゲノカズラ科	
1. ヒメスジラン	多良岳、鬼ヶ鼻
●ハナヤスリ科	
2. ヒロハハナヤスリ	山内町、巖木町 岸岳、鳥栖市
3. シモワサハナヤスリ	富士町杉山
4. ヒロハハナヤスリ	馬渡島
●コケシノブ科	
5. ヒメハイホラゴケ	富士町市川
6. オオハイホラゴケ	大川内山
●イノモトソウ科	
7. ホングウシダ	岸岳(北限地)
8. オドリコカグマ	多久市北多久町
9. アイコハチジョウシダ	駒鳴峠、岸岳
10. ヤワラハチジョウシダ	駒鳴峠
11. カラクサシダ	九千部山
12. ウラゲイワガネ	春振山、金山、羽 金山
13. オオフジシダ	羽金山、金山
●オシダ科	
14. イワテンダ	国見山
15. オオキヨスミシダ	岸岳
16. カタイノデ	羽金山
17. オンガタイノデ	東春振村松隈其他

18. アカメイノデ	春振山	55. トゲカラクサイヌワラビ	羽金山、長野峠
19. フナコシイノデ	春振山、長野峠、 羽金山	56. オコカラクサイヌワラビ	春振山、天山、其 の他
20. キヨスミイノデ	九千部山、金立山、 多久市石州分、羽金山	57. ユノツルイヌワラビ	長野峠
21. ナメライノデ	作礼山、天山	58. ヘビヤマイヌワラビ	羽金山
22. メヤフソテツ	青螺山	59. ミドリヤマイヌワラビ	羽金山
23. ハガクレカナワラビ	(新種) 九千部山、 石谷山、清水	60. サキモリヌワラビ	九千部山
24. ツクシカナワラビ	大和町川上、相知	61. ヒメミゾシダ	岸岳(北限地)
25. シモダカナワラビ	石谷山、相知	62. ムクゲシケシダ	九千部山
26. オトコシダ	石谷山	63. ナチシケシダ	嬉野町各地
27. ハガネイワヘゴ	(新種) 羽金山	64. ヤブシダ	富士町杉山
28. シビイワヘゴ	太良町中山	65. ミドリワラビ	鹿島市平谷
29. イヌイワヘゴ	嬉野町、春振山、 作礼山	66. ハコネシケチシダ	市川峠
30. キヨスミオオクジャク	石谷山	67. オニヒカゲワラビ	大川内山、駒鳴峠
31. ハコネオオクジャク	天山、羽金山、長 野峠	68. ウスバミヤマノコギリ シダ	金山、鬼ヶ鼻、九 千部山、春振山
32. イワヘゴモドキ	多久市石州分	●シシラン科	
33. ワカナシダ	九千部山	69. アイオオカグマ	御船山
34. アイノコクマワラビ	多久市石州分	●チヤセンシダ科	
35. ツクシヤワラシダ	春振山、九千部山、 石谷山	70. コタニワタリ	羽金山、鳥帽子岳
36. ミドリヒメワラビ	巖木町、多久市北 多久町、九千部山	71. クモノスシダ	伊万里市岩谷
37. オオベニシダ	石谷山	●ウラボシ科	
38. オオハリガネワラビ	多久市北多久町	72. フギレイワヤナギシダ	(新品種) 巖木町 広瀬
39. イワハリガネワラビ	天山、石谷山	73. ハゴロモヒトツバ	小城町
40. テツホシダ	唐津市佐志、七ッ 釜	74. ヒメサジラン	作礼山
41. トガリバメシダ	富士町北山	75. オシヤクジテンダ	春振山
42. オオサトメシダ	春振山	●ヒメウラボシ科	
43. サカバサトメシダ	九千部山	76. ナガバコウラボシ	九千部山
44. フクロシダ	多良岳	●シシラン科	
45. キリシマヘビノネゴザ	羽金山	77. ナカミシシラン	羽金山、金山
46. ヒロハヘビノネゴザ	羽金山		
47. ツクシイヌワラビ	富士町市川、作礼 山、蛤岳、九千部 山他		
48. トゲヤマイヌワラビ	作礼山		
49. ナンゴクイヌワラビ	石谷山、作礼山		
50. カラタニイヌワラビ	岸岳		
51. ケヤマイヌワラビ	春振山		
52. トガクシイヌワラビ	春振山、作礼山		
53. セフリイヌワラビ	作礼山		
54. オトマスイヌワラビ	九千部山		



ホングウシダ 岸岳(北限地)

(学芸課 手塚静雄)

標記

はくじやま 白蛇山岩陰遺跡第一次発掘調査報告

—伊万里市東山代町脇野所在—



① 遺跡の所在地

波静かな伊万里湾を眼下に見、松浦富士と通称される腰岳を東に望む国見山麓の裾野、標高約100mの岩戸山、伊万里市東山代町脇野に白蛇山岩陰遺跡は位置する。

この岩陰遺跡の南西に国見連山が「岩屏風」のようにそそり立ち、東を佐賀県・西を長崎県に二分し、佐賀県側の西有田町には盗人岩洞穴遺跡・伊古石遺跡・坂の下遺跡などの縄文遺跡があり、伊万里湾にぞそぐ有田川の流域には多くの縄文遺跡が点在することが知られている。

さらに遺跡の南東には黒曜石の原産地である腰岳がなだらかなスロープを描き、伊万里湾の東方には300～400mの山々が連なって見える。遺跡のまわりは杉の大木が茂り、この地に室町時代より真言宗の寺があり、岩壁には磨崖仏や五輪塔などが刻り込まれてあり、密教寺院のおもかげを残している。

このように遺跡は信仰の対象となっている「聖域」の中に上洞と下洞から成り、上洞は奥行が6mと比較的浅く、横巾40mと間口の広い岩陰であり、下洞は流入土のため正確な数値ではないが、奥行7m、間口8mと比較的小形のいわゆる洞穴で、いずれも東南に向かって開口している。



遺跡の近景

② 発見・調査過程

昭和42年8月、盗人岩洞穴遺跡の発掘調査を行なった際、他にも洞穴・岩陰遺跡が存在するのではなからうかと推察していた折、昭和43年4月下旬、岩陰遺跡の所在地に近い東山代町浦川内在住の徳永重利氏によって、弥生時代の貝塚と岩陰遺跡が同時に発見された。連絡を受けた県教育委員会は同年5月に市教育委員会と現地踏査をおこなった結果、岩陰遺跡は南東に向かって開口していることと、湧水が存在すること等から遺跡ではないかと推定し、同年9月6日より8日までの3日間、遺物・層位の確認のため県教委・佐賀大学・伊万里市郷土研究会によって予備調査がおこなわれた。

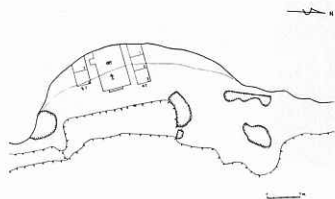
予備調査では遺跡の中央部にB試掘溝、北端にA試掘溝を設定し、B試掘溝は出土遺物が多量をきわめたため途中で打ち切り、A試掘溝を完掘した結果、表土より基盤まで270cmあり、9層が確認された。

出土遺物は上層部では骨細系の土器と押型文土器とが、下層部ではマイクロ・コア（細石核）、マイクロ・ブレイド（細石刃）、ポイント（尖頭状石器）等が出土し、縄文時代から先土器時代までの遺跡であることが判明した。

昭和45年10月に佐賀県立博物館が開館し、昭和46年博物館事業の一環として、「佐賀県における縄文時代より先土器時代編年の確立」という目的をもって、地元伊万里市教育委員会と共催で、白蛇山岩陰遺跡第一次発掘調査団が結成された。佐賀大学考古学研究会、伊万里市郷土研究会、地元中高校生の援助を受け、7



発掘作業と見学者



月25日より8月3日までの10日間発掘調査が実施された。

発掘調査は遺跡の南側に主眼点をおき、「御堂」をはさみ北側に東西に2m×6mのAトレンチ、南側にAトレンチと平行し2m×4mのBトレンチを設定し層位論と原位置論を併用し、出土遺物のすべてを正確に記録に留めるという調査方法を採用し、発掘調査中、岡崎敬氏・麻生優氏に遺跡調査の方法について診断を受けた。



発掘状況



遺物の出土状況

(学芸課 森 醇一朗)

資料紹介①

聖像三体

—鬼丸聖堂 その1—

ここでいう聖像三体は鍋島報效会に永く所蔵されてきた孔子像と四哲の中の二体の立像の三像のことでこれらは鬼丸の聖堂で祀られてきたものと伝えられ、一般に鬼丸聖堂の三聖像といわれている。

そもそも孔子の祭儀がわが国で行なわれるようになったのは奈良時代の律令制にもとづく大学、国学が始まったことであるが、これが全国各地で祀られるようになったのは江戸時代からである。即ち政治の学問的支柱を儒学に求めるようになると幕府は勿論各藩でも儒者が重用され、藩主をはじめ主なる家臣が政治や学問の講釈をうけるようになった。それがさらに子弟の教育にまで発展していくようになると各地で学問所（藩学）が生まれるようになった。一方儒学の尊重はそのまま孔子崇拝の風潮となり学問所とは不離一体の孔子堂（聖堂）が造営されるようになった。

佐嘉藩では二代藩主鍋島光茂が元禄4年（1691）に聖堂を建て多久伊予守（光茂の三男、多久五代邑主多久茂文）から聖像の寄附をうけて秋葉が行なわれたことに始まる。ついで三代藩主鍋島綱茂は本丸内に聖堂を設けていたが場所が諸人の詣拝に不便であったので元禄13年（1704）城外鬼丸の西御屋敷に移した。これが即ち一般にいわれる鬼丸聖堂である（西御屋敷は今の佐大の東部、宝琳院の北側といわれ当時「観顔荘」と名づけられ、聖堂を中心とした佐嘉藩学の発祥地である）「綱茂公御年譜」によると「11月27日御本丸内聖堂…西御屋敷へ聖像四配并御祭器御書庫門額共引移サル」とあって現存する三体が、この年譜にいう聖像四配（二体欠失）といわれてきた。

孔子像は鍮銅製の倚坐像で全高62^分寸、台座は幅30^分寸の半円形で像全面に極彩色がほどこされている。冠は褐色で緑どり青・緑・赤が配色され上衣は濃緑、袷は黄、襟、袖口、裾は青、顔や手は黄色で配色されている。そして冠、上衣、袷には竜、日、月、山、きじ、その他種々の模様を描かれている。袷の一部が剥落しているが



聖像三体

そこから地金に線影の模様が見られるのは興味深い。顔は耳が大きくたれ見開いた目と半ば口を開いた面貌は「へー」、それは意外だ」とも語りかけているような表情で反面ユーモアがあり親近感さえ抱かせるものである。

脇像の二体の立像は像高60^分寸の寄木造りの木像で首は挿し込みとなり二体とも同一の手法で作られている。素地の上には粉を厚くぬりその上に彩色がなされ上衣全面に金線で紋様を描かれている。開口した立像の上衣は褐色、袖口、襟、裾は濃青色で他に白、赤、栗、緑などが配されている。

開口した立像は上衣は栗色、袖口、襟、裾は緑、他に白、黄、青などが配されている。首の挿し込み部に和紙が貼ってあり墨書きの部分に「佛光寺○宝町○○顔子大佛○○作え○」とある。多分この像が顔子であることと製作者名を記したものであろう。

面白いことにそのことを実証するが如く開口した立像の胎内から11.5×14^分寸の一枚の紙が発見された。それには「京佛光寺通宝町東入丁 北加王大佛工 水谷作之進 四十五才にして右四哲像ヲ作り 宝曆十二年午九月吉日」とある。この筆法は顔子像の挿し込み部に書かれたものと同一である所から多分、同一人による造立銘であろう。

要するに、現存する立像二体は本丸から鬼丸聖堂へ移されたものではなく、京都の佛師、水谷作之進が宝曆12年（1762）に製作したものであることが判明したのである。また、孔子像は多久茂文の寄附のものかどうかは明確ではないがその製作は二体よりも古く、体の彩色にならって後で地金の線影模様の上に極彩色をほどこしたと思われる。

なお鬼丸聖堂は第十代藩主鍋島直正の天保年間に弘道館内に聖堂建築の議があり祭典も弘道館内で行なうこととなって弘化三年（1846）取りこわされた。現在残る遺品はこの聖像三体と天龍庵の額でいずれも江戸時代に於ける佐嘉藩の学問の精神を今に伝える資料として貴重なものである。両者は昭和45年佐賀市の重要文化財として指定された。

(学芸課 尾形善郎)



開口立像の胎内にあった墨書

資料紹介②

「裸婦」

— 藤島武 作 —

この絵を見て、何よりもまずわれわれの眼に飛びこんでくるのは、色彩の素晴らしいぬえと、圧倒的に力強いヴォリュームであろう。

赤を主体に三原色を基調とした色彩は、藤島独特の盛り上げと巧みなヴァレールの使用によって、われわれに熱い情感を呼び起すし、一見、荒々しくみえるが引締った筆触と、太く力強い人体の輪郭線は、安定した構図の中で、しっかりとした量感を画面に与えている。

ここでは、もはや、モデルの美醜はたいした意味を持っていないし、空間の正確な遠近法も求めることはできない。事実、モデルの顔は、わずか数本の筆触で目鼻立ちを示してあるだけだし、彼女の右手が置かれている台は、奥行を暗示さえしていない。

藤島の「裸婦」は、明らかに彼独自の色彩と、確かな構成と、力強い筆触からだけでできている。また、ここでは、油絵のマティエールがはっきりと自覚されており、すでにモデルの側にはなくて、画家の内だけに甦る美の認識がある。

それ故、この絵を見れば、近代の日本洋画界が、藤島に至って、やっと油絵らしい油絵を手にすることができたといわれるのも頷けよう。

勿論、そのことは、単に彼が技術的に西洋の近代絵画を消化しえたということだけを意味するものではない。むしろ、彼の天性的な画才が、西洋近代美術様式の中に、ある共通の基盤を見出したことを物語っている。

彼がヨーロッパへ渡ったのは、明治三十八年、三十九歳の時であった。同郷の黒田清輝の推せんによって明治二十九年から東京美術学校の助教授に在職していた彼にとっては、年令的にむしろ遅い渡欧であった。しかし、その後の彼の長い画歴と、当時、すでに彼が黒田や久米の外光派流の描写にあき足らなくなっていたことを考えれば、彼にとっては、好都合の時期であったともいえる。

四年間にわたるフランス・イタリア留学中に、彼が直接教えを受けたのは、コルモンやアルペール、デュランといった、いわゆるフランスアカデミーの画家たちであった。これら正統的な画家たちの指導が、彼の留学目的であった装飾画の研究を満たすものであった

かどうかはともかくとして、少くとも彼は、伝統的な西洋絵画の技法を身につけることができた。とりわけ「画をかくには豫め十分の知識を蓄えて置いて、画布に向っては感覚を鋭くして躊躇せず一気に描け、塗抹は是れ事とするは最も不可」というデュランの教えは、藤島に力強い筆触を生みださせている。

しかし、もっと重要なことは、彼が、西洋美術の新旧の変り目の中で油絵を研究できたということであろう。黒田や久米が垣間見ることできた印象派の光と色彩は、すでに、ゴッホ、ゴーギャン、セザンヌら後期印象派と呼ばれる人々を経て、さらにマチス、ルオーらへと高められる中で、絵画の近代性をかち取っていたのである。

つまり、藤島が、これらの新しい時代の息吹を、直接肌に感じたこと、しかもそれらの美術に深い共鳴を覚えたことこそは、彼の留学における最大の成果であった。

事実、彼は帰国後、山下新太郎や安井曾太郎ら、ヨーロッパの新しい美術思潮に共鳴した人々と共に、わが国美術界に新時代をもたらしたのである。

その意味からも、この絵は、外光派流の写実から完全にはなれた、いわば日本における油絵の近代化を一挙に切開した出発点の作品のひとつとして、きわめて高い評価を得るものでなければならない。



63×51cm. 油彩

博物館日誌

- 7月24日 白蛇山岩陰遺跡発掘調査開始
 8月3日 全 上 終了
 8月8日 長崎県立美術博物館友の会会員81名来館
 8月11日 九州大学森貞次郎氏来館
 8月12日 ブラジル大石敏子氏来館 鳥の化石寄贈
 8月18日 県内離島中学校生徒 300名見学
 8月19日 伊万里市野口鉄男氏より民家模型寄贈をうける。
 8月29日 熊本市立博物館友の会会員85名来館
 8月31日 「坂の下縄文遺跡展」(中展示室) 閉場
 9月1日 人事異動発令
 9月3日 東京鍋島家事務所長 水町秀雄氏来館
 9月4日 第2回研究講座「北九州におけるカササギの分布」佐賀大学 久保浩洋氏
 9月5日 常設展「佐賀県の歴史と文化展」閉場
 9月10日 東京国立博物館普及課長 関 忠夫氏来館
 9月11日 東京国立博物館「日本古美術展」閉場
 " 特別講演会「日本美術の特色について」
 東京国立博物館普及課長 関 忠夫氏
 9月15日 日本古美術展特別映写会
 9月19日 佐賀県児童生徒理科作品展開場
 9月30日 全 上 閉場

行事お知らせ

事業名	月日	曜	時間	摘	要
日本古美術展	9・11 ▼ 10・3	土 日	9.00～ 16.30	無休	観覧料 一般 大高生 中小学生(円) 個人 180 100 50 団体 150 80 30
日本古美術展 特別講演会	9・11	土	13.00 から	無休	日本美術の特色について (聴講無料) 講師 東京国立博物館普及課長 関忠夫先生
日本古美術展 特別映写会	9・15 10・3	日	13.30から 13.30から	無休	「古代の美」「土代彫刻」「飛鳥美術」「天平美術」 「鎌倉美術」「室町美術」「浮世絵」「美の殿堂」
画 聖 鉄 斎 名 作 展	10・7 ▼ 10・22	木 金	9.00～ 16.30	無休	観覧料 一般 高生 中小学生(円) 個人 150 100 50 団体 120 70 30
画 聖 鉄 斎 特別講演会	10・9	土	113.3. から	無休	講師 富岡益太郎先生 (聴講無料)
第21回県展	10・30 ▼ 11・7	土 日	9.00～ 16.30	無休	
明治・大正・昭和 名作美術展	11・15 ▼ 11・28	月 日	9.00～ 16.30	無休	観覧料 一般 大高生 中小学生(円) 個人 150 100 50 団体 120 70 30
全 特 別 講 演 会	11・20	土	13.30 から	無休	近代美術における写実の展開 (聴講無料) 講師 佐賀大学教授 石本秀雄先生
常 設 展 佐 賀 県 の 歴 史 と 文 化 展	12・4 ▼ 12・26 1・5 ▼ 1・16	土 日 水 日	9.00 16.30	無休	自然科学、考古、歴史、美術工芸 月曜休館

人事異動

9月1日付

- 副館長兼総務課長 熊谷正門氏
 教育庁社会教育課長へ
 学芸課長 木下之治氏
 副館長兼学芸課長へ
 県出納室国費係長 納富武一氏
 博物館総務課長へ
 学芸課 手塚静雄氏
 資料係長へ

博物館報 第4号
 発行年月日 昭和46年10月1日
 編集 古賀秀男
 発行 佐賀市城内一丁目15-23
 佐賀県立博物館
 印刷 佐賀印刷社